

『第13回 石丸繁子書道展』 作品目録

令和元年11月17日（日）～11月24日（日） 松山市立子規記念博物館特別展示室

タイトル : 『子規の眼』 明治30年の子規—芭蕉と蕪村の影響

コンセプト : 今展は、「子規の眼」と題し、明治30年の子規に光を当てた。それは、「芭蕉と蕪村」の句を真似ながら句を詠み、又、新素材の拡大、古典摂取の深化を図った子規の姿である。子規は芭蕉について、古を模倣することなく、自ら発明する姿勢を評価し、心酔。ただ、この年は、芭蕉への模倣を脱し始めた時期でもあった。蕪村については、明治になるまで芭蕉の陰で忘れられていた俳人としての魅力を発見し、「俳人蕪村」を「日本新聞」に連載することで、俳人として高い評価を決定付けた。子規は「芭蕉と蕪村」の影響を受けながら、自らの世界観を詠み、独自の旗幟を明らかにしていったのである。私は、作品制作において、子規の鋭い慧眼を意識し、意欲的に筆を動かせた。

新年の句

初夢の何も見ずして明けにけり

季語「初夢」

季節「新年」

苔太く開かぬを愛す福壽草

季語「福壽草」

季節「新年」

芭蕉の影響

晝過や隣の雛を見に行かん

季語「雛」

季節「春」

床の梅散りぬ奈良茶をもてなさん

季語「梅散る」

季節「春」

もたれよる柱ぬくもる冬籠

季語「冬籠」

季節「冬」

晝門を鎖す残暑の裸哉

季語「残暑」

季節「秋」

蕪村の影響

兄弟の子が喧嘩する蒲団哉

季語「蒲団」

季節「冬」

雲無心南山の下畑打つ

季語「畑打」

季節「春」

唐辛子に朝日さしたる飯時分

季語「唐辛子」

季節「秋」

牡丹剪て十日の酔のさめにけり

季語「牡丹」

季節「夏」

大砲のどろどろと鳴る木の芽哉

季語「木の芽」

季節「春」

戸を叩く女の聲や冬籠

季語「冬籠」

季節「冬」

新しい素材句

船をあがる横濱に夜の明け易き

季語「明け易し」

季節「夏」

水仙の日向に坐して寫眞哉

季語「水仙」

季節「冬」

蕪引く頃となりけり春星忌

季語「蕪引」

季節「冬」

秋海棠に齒磨こほす端居哉

季語「秋海棠」

季節「秋」

境涯句

夏瘦や牛乳に飽て粥薄し

季語「夏瘦」

季節「夏」

足の立つ嬉しさに萩の芽を検す

季語「木の芽」

季節「春」

時鳥毎晩鳴て足痛し

季語「時鳥」

季節「夏」

萩芒今年は見たり來年は

季語「萩」

季節「秋」

※表記は「子規全集」による。 ※作品解説は「正岡子規と俳句分類」柴田奈美著（思文閣出版）参照。